

第 49 回慶應 E U 研究会

報告論題：「ノーベル賞の国際政治学 欧州統合とノーベル平和賞」

報告者： 高崎経済大学・地域政策学部・教授 吉武信彦

報告の成果と課題：

国際政治学の観点からノーベル賞を研究する一環として、本報告では欧州統合とノーベル平和賞との関係（特に、第二次世界大戦前）を歴史的に分析した。歴代受賞者の中に、欧州統合に直接関係した人物、団体はいない。これはノーベル平和賞が授与されなかった失敗例としてノルウェー・ノーベル研究所所長も認識している。

しかし、現時点で利用可能なノルウェー・ノーベル研究所所蔵史料を検証すると、ノーベル平和賞候補となった欧州統合関連の人物はいた。これまで判明した範囲では、1920年代にパン・ヨーロッパ運動を始めたりヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー（1894～1972年）が欧州統合関係で最もノーベル平和賞に関わりをもった人物と位置づけられる。特に、1930年代には毎年のように推薦されており、ノーベル委員会も彼に大きな関心を示した。ノーベル委員会のクーデンホーフ・カレルギー評価は、議事録がなく、詳細は不明であるが、評価は高いとはいえなかった。国際連盟との関係を最重視していた当時のノルウェー政府の立場からはパン・ヨーロッパ構想に魅力がなく、ノーベル委員会も最終的に同様の判断をしたと考えられる。また、ノルウェー人の推薦者がおらず、ノーベル委員会内部から彼を強く推す声なかったこともマイナスに働いたと考えられる。

今後の課題としては、まずクーデンホーフ・カレルギーとノーベル平和賞との関わりについて、第二次世界大戦前のみならず、第二次世界大戦後についても検証する必要がある。評価がいかに変遷したのかを推薦状、ノーベル委員会報告書などを通じて詳しく分析したい。また、クーデンホーフ・カレルギー以外の欧州統合関係者とノーベル平和賞との関わりについても改めて調査し、史料の発掘に努めたい。